





伊勢參宮名所圖會卷之二

目錄

勢田橋 <small>古戰場。頓宮田原。龍神祠。依左古祠。</small>	栗古郎 <small>日野。栗大樹。</small>	勢田驛
建部明神 <small>於左。大茅新田。月淪池。</small>	老上川 <small>玉水の池。</small>	榎原
野路玉川	乳母 <small>餅。</small>	山田矢橋
鞆寄八幡	常善寺	草津川 <small>下。彰屋敷。</small>
岡村	坊袋	川面 <small>日池。</small>
灰塚山	三上山 <small>榎山。</small>	梅の本 <small>是齋。</small>
善光寺	伊勢落 <small>金土。</small>	甲賀郡 <small>日三郎。五平。</small>
石部驛 <small>吉原。吉原。合川。</small>	阿星山 <small>東寺。西寺。</small>	掛子袋 <small>平松。</small>
針村 <small>日川。</small>	横田川 <small>榎。岩。鳥。幡。岩。</small>	泉 <small>北。服。林。口。</small>
馬場 <small>先。八幡。</small>	大宮社	大徳寺
水口驛		



大園寺

城山

正源寺

布引山

栗林。新瀨。小里

今在家

稲川。法泉碑

瀧樹明神社。伊佐川

大野。徳原

市場。前野

松尾。松尾川

土山。一里山

田村明神

田村川

田尻野。猪沼明神

解坂。後塔

猪鼻

山中。聚樂寺

榎。澤

勢州境

鈴鹿山。三津山。坂本。田村社

伊勢海硯

岩窟觀音

坂下驛

橋弁天

小女溪

法安寺

燒地藏

金藏院

插本

一里山

朝日弁天

權現山

四彩茶屋

筆捨山

羽黒山。奇石

茶鍋淵

一瀬。日川

大黒石。惠比須石

関驛

御彩媛塚

清見原。天皇塚

長持石。さるび石

関地藏。日開眼活

名ぞ様

久我白石明神

城趾

三日城

和琴橋

川上瑞光寺

湯津盤

清岸山。福藏寺

追分

関川

右驛

楠原

天神社。日森

觀音堂

中繩

掠本

片淵城趾

高野尾

豊久野。砂掛松

野寄

土岐百塚

窪田

光明山。安養寺

六大院

空也堂

坂部

例櫻。例齋塚

一の宮

一身田。高田。専修寺

三彩茶屋

中野

大乃已所神社。大部田

小丹浦



勢田の橋

風雅集

貞子の

龍江

そのあふ

東

乃

勢田の

長橋

井

そのあふ

兼盛



五月雨

癸

かくれぬ

そのあ

瀬田乃

石





勢田橋 大橋 幅七間 小橋 幅四間 中島の間 十五間合長 志賀栗平の境に跨る

長橋唐橋又と名なきの近江 園中北水ごとくを湖入て其末流又取入

宇治川を経て淀川に入る橋の豊饒未詳

或説は推古天皇元年壬申夏百濟化東の者能く長谷川の源を知りて橋を造る

即本曾校其百八十橋を造じむ時の人これを考て踏子唐より此付よりや造り

の我々諸將進至淡田帝悉衆陣橋西撤拒之云云此付脱は橋のりしと云

二月抄の抄二幸自燒る云云

橋の板も若むと斗ぬりたり或代るあらんせしの長橋 匡房

勢田頓宮の舊跡 其地赤洋これ頓宮都と出てこの本の頓宮入りせしが御額の擲をぬき

源氏祿 大橋つと何れは地をなしてと云ふことにて

ふりててくくふの終りも終り川やせれば波は神ぬと一や

勢田古戦場 大友の皇子軍やぶるくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

勢田城 趾川の東あり山岡義作入道石阿弥城

勢田 勢田川より 昔此地は栗の大木あり因て郡名と云

今昔物語語云くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

栗之里 名は栗の里と云ふことにて

龍非祠 俵屋古祠 橋の石は祠にあり秀郷公孫孫の辺を通る

勢田 勢田川より 昔此地は栗の大木あり因て郡名と云

栗太郡 勢田川より 昔此地は栗の大木あり因て郡名と云

今昔物語語云くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

栗之里 名は栗の里と云ふことにて

龍非祠 俵屋古祠 橋の石は祠にあり秀郷公孫孫の辺を通る

勢田 勢田川より 昔此地は栗の大木あり因て郡名と云

司差供給次 到野洲河後と云

建部明神社 一宮 所祭大己貴命天武帝白鳳二年の勸請豊

葦原一宮の中其二と云 神社啓蒙 武部大社一宮大社天日一命と云

勢田 勢田川より 昔此地は栗の大木あり因て郡名と云

今昔物語語云くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



平治物語頼朝遠流の条下曰盛安  
 大治と申たりり人々を御りぬ上  
 せしは橋もあきて舟にてむくの地へ  
 入りし路へは公方とてお送り  
 たりし社の人々を御りぬ神  
 々しく向ふまけし明神とて依敷  
 たりし今ねは清前と通教して  
 ひ給のりりさしりまんとぞ  
 たりし多し多し後あけ人あ  
 たりし盛安とていひ給て  
 清安とていひ給ていひ給て  
 せし不思議の事とていひ給  
 たりし故に君はしやうとて  
 八幡清前りて大徳とて  
 盛安清供にて石の上と  
 同安ありに十三の童  
 子に弓箭とていひ給て大徳と



マセ給ふ義朝の  
 やまのひらてあり  
 といと申され  
 とい御守殿の  
 内よりけだる  
 御衣を清く  
 せめてけしめ  
 せ給ふは清く  
 先給ふは食せよと  
 らるればまご物給て御  
 衣を清くせよと申  
 されはわあひとて物申  
 されとてけしめ  
 せ給ふは清く  
 といを清く  
 押さるるを三  
 つりて少き  
 せ給ふは清く  
 ねりひり下界





野路玉川

万をもとん

神治の

玉川

波

月舟

俊教



所名

所名

所名

旧事記  
二見也  
○ 祭礼四月中午日之古り大社之宮  
田原之宮  
○ 大茅新田  
○ 月の輪池  
村の入口

老上川  
鴉の宮  
濁の池の中あり  
○ 玉水の池  
街道の右あり  
○ 榎本原

野路玉川  
日本六ツの玉川の其一ツ之此の地あり  
○ 野路玉川  
ありて萩の地を極へて中へて入るてその人のこれを玉川と稱す

草津驛  
此驛中より中へ道本曾海乃の波あり即標石を立す

千首  
○ 萩津より渡り出る方ありやとやめいれは志をたれし舟  
為尹

乳母餅  
○ 乳母餅の餅は標石を渡りて其の地あり  
餅の餅は實の圖の傍に記す

山田久橋の紀場  
○ 山田久橋の紀場は西の傍あり  
石場より記して渡り五十町の海上へ田の傍

掘後百首  
○ 掘後百首  
あはてらや久橋の渡りし舟とていふは此の傍あり  
兼昌

頼朝八幡宮  
○ 頼朝八幡宮  
天武天皇白鳳四年大中臣清麻呂勸請之傳曰建久元年十月二日頼朝

上洛之時此祠若とる村馬上より教を記していふは此の傍あり

上洛之時此祠若とる村馬上より教を記していふは此の傍あり







文橋

括弧集月の後舟と云  
物語又ひく湖水平  
舟がくしく渡海なる  
一が此舟の出東より由  
頼志加の造り月  
とく花女あつるが夏の  
くつたる枕とくりく  
睡ひたる男ある後流  
を流してそゆく今  
何とくくせん我の田  
且年経る楠の天  
ちるが其本と切て  
船と造り湖の  
のいひせんとの  
守より流るる切  
べいと空りぬれども  
其舟を万人よりても  
てくくはし其の



船内は狭し一なる男  
を西の守と長し船り  
舟のりて  
其船をくくふ  
舟のりて  
は  
さし相うか  
る一と  
舟のりて  
の如く舟の  
みいひ物  
とげ

け抱渡り三舟の流るる回  
矢標の流るる舟の流るる  
人かうと月  
自ら  
とま  
のり  
舟のり  
舟のり











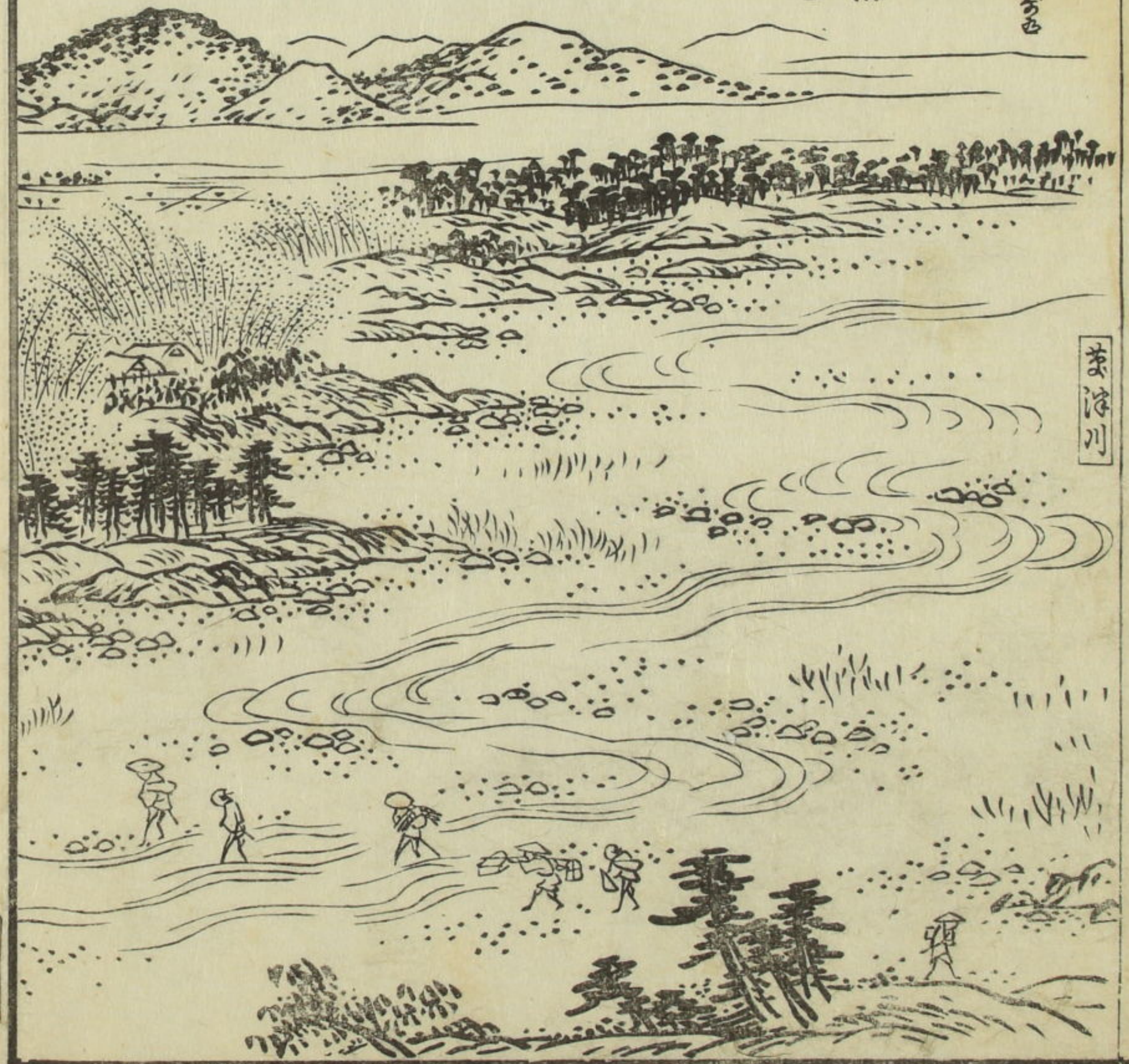


三上山 一名巽松山といふ  
連山と標出らるる所あり

益須那がうつこの山の  
なまよんゆらら松葉樹  
ふとのふあふまびへく絶景  
いんのかたき一盤三上の  
頂上三ツ岩ありてふよ

伊勢物語七ヶの天と  
三上山乃吳名之其くそ  
赤人

浪の三とのふも  
塩尻のやま  
今按げをそりて其能  
な一ふよ此ふふを



長津川

てはありふるとるふより  
てふれふらのぬる  
後人の能ふれ  
赤人とのふも  
七ヶの大ゆあふよ

富士御後の記

富士のね  
遠き

三上の  
ふのたれ雲 兼考法印

三上社 村あり

祭神天行影命  
尾登いて炊と陶美と合ふ



三上山







梅の本

夏衣ゆくても涼く梓弓へそ人のふ乃松の

夏衣ゆくても涼く

信海

清香を

後を

ひらの本

茶



新撰撰夏

夏衣ゆくても涼く梓弓へそ人のふ乃松の

家隆

石部社 石部の町の延喜式麻垣上社 甲斐郡上の社 吉姫大明神下社の

吉彦大明神を祭る世記曰 倭姫命阿佐加瀧又瀧王をまつまこと

多彦連木が祖宇賀まはる吉比女吉彦二人系りあき其の吉姫地

口の御田系 麻園を執むるとりて因て系宮い由縁ある社方り啓蒙

落合川 白雉川とつひの春も村西の村の

阿星山東寺 長生寺とて天竺宗山のまゝの郡街及び十八町西南にわたりて

阿星山西寺 常樂寺といふ寺あり西寺とも鬼籠の法會あり其名を辨性寺と云

西寺は正月十八日東寺は正月廿四日あり 鬼籠の面共を武の所代りて傳りて其

拈子袋 平松村 け村の右の方のふの松の根より一山九二町余の間に

針村 入口の小川針川といふ名あり松葉集と傳勢園の名をとりて松葉集と

家集

か衣ぬ針川の若柳の糸よりうりて其糸も糸より

躬恒

里夏身 近江の浦といふ名あり但し此ところの名は

所名





石部驛

宿のいかに  
平松村の後の  
押さふ松  
松とあり





夏見の里

方丈記に冷水の  
 流といえのあ  
 りあつてとて  
 け本偶の杉葉  
 り元の水にして  
 ちりも盛衰をそと  
 ずるまよまをくち  
 と松葉紙まのり  
 だん  
 とまへん





横田川

一名石部川

横田川石部

川原の蓬生

秋風さし

とやこ

長明

源の甲斐郡

大沼原のふた

より出て去の

東北へ出松尾川

とぬる西南へ

がれて酒人村の

南西にて野田川

と合へ横田川

とぬる南より

又西へ生く



初雪

石部の山

栗友郡

金ふの近

水にて野洲川

とぬる勸修寺

これより西へ

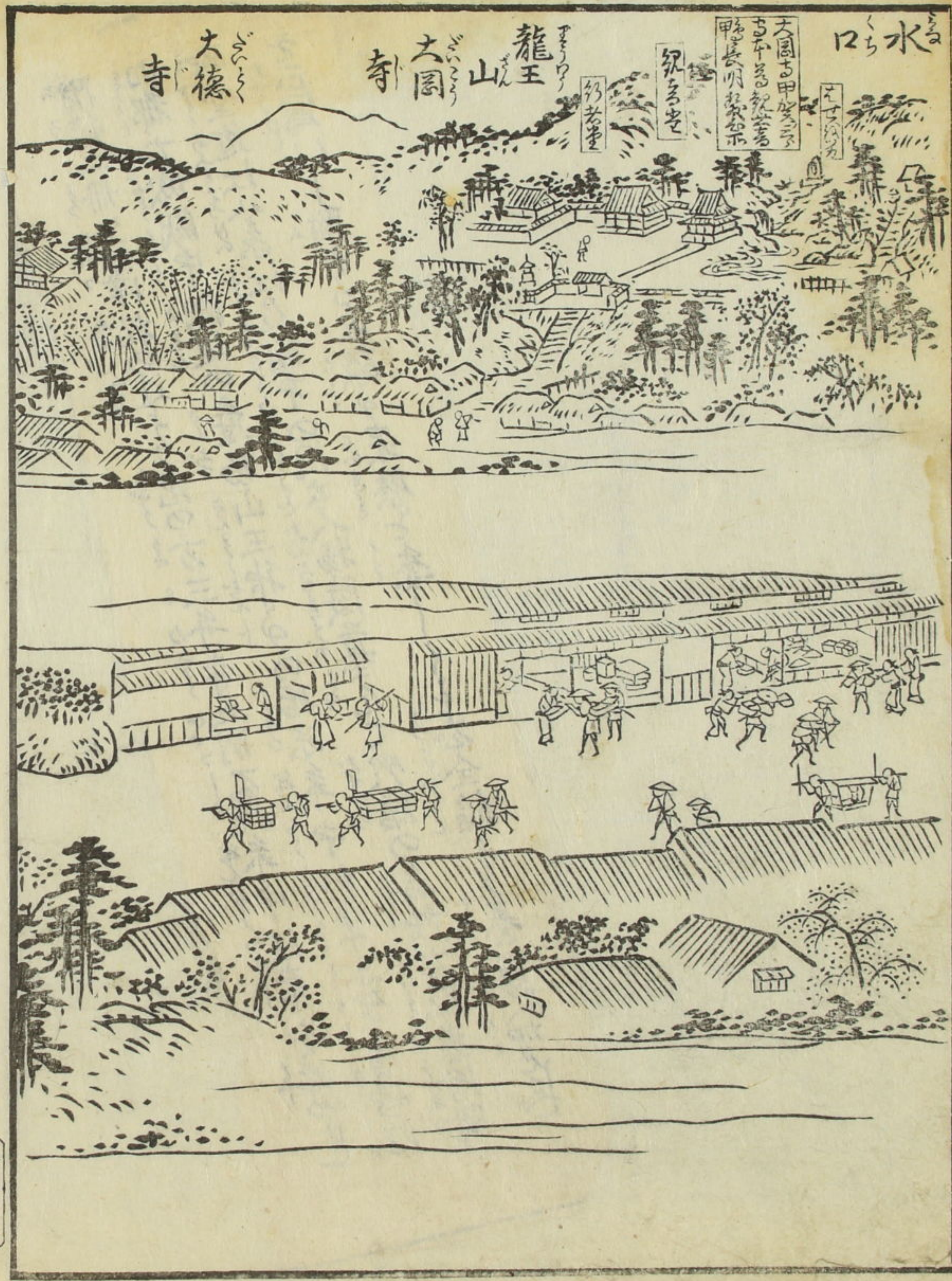
流はと笑村の

とぬる南より

又西へ生く









所名

山夏身 此不極川の原酒又は春ももふを信る茶屋多し其家毎又た一里水  
 吉永 三雲村 江南六角家旗三雲主馬之助 田川 小川あり横田川  
 横田川 土橋あり西の方又山あり 椀字山石 鳥帽子山石 あり  
 泉村 光廣御道の記は泉と云ふ

夏の日れゆくてぬるき風より泉と云ふなり

北脇 表の内八幡 林口 馬場先 南の方又金崎山飯道寺あり岩本院と云ふ  
 正八幡宮社 水口本戸の外を林と云ふ

水口驛 御所筋九丁余 龍王山 大岡寺 上あり

大宮社 坂下の南 大徳寺 漆土宗之細 秋葉権現の社あり

城山 大徳寺の傍に甲斐守の墓あり 正源院 秋葉権現の社あり

布引山 水はれ口は丸く見ゆる山三里が向峯に低く流る布と曳く

栗林 新城 小里 外形岩 岩神 今在家

岩神 初まて岩と云ふ

栗林 新城 小里 外形岩 岩神 今在家

所名

# 岩神



初まて岩と云ふ  
 此岩の形  
 抱き出く旅  
 人又信て其  
 子の名氏を  
 を信てせり  
 けり大石寺石の  
 里入り向る  
 右の方に川あり  
 あり去心の奥より  
 出く横田川へ流と入る



稲川。山口志兵衛重成清泉碑。稲川の古橋を越て左の方より三尺斗の石舟の

山口志兵衛重成者勢州之人也本性住山氏初名盛治號三左衛門其父甚左衛門吉久仕飛彈守蒲生氏鄉領鈴鹿郡住山村娶小川元京女生一女三男長曰内記也盛治者其弟也氏鄉移封奥州吉久亦從之盛治及十八歲來江府事修理亮山口重政慶長十八年重政及嫡子伊豆守重信有故性肯竄于武州入間郡生越龍穩寺重治辛勤竭方奉之元和元年攝州難波戰重政重信屬掃部頭井伊直孝正攻之河州若江重信一番合鎗先獲首級其身亦被瘡冠兵進至盛治從其役與同僚兩三人擊退來負重信掃部頭重信得免既而重政嘆盛治戰功跋群示感書界山口氏及其諱字且授家紋於是盛治改稱山口志兵衛重成亂平之後重政赴高野山欲至南海使盛治事雅樂頭酒井忠世寬永五年遇赦歸江府任幕下采邑依舊同七年重成歸侍重政同十二年重政易實次男修理亮弘隆嗣其家重成勤仕如故正保四年弘隆奉台命守河州水口城重成從行水口土山之間水乏行人苦渴重成聞山麓清泉湧出盛夏不涸掘井于稻川疊石為鰲大為行旅之便兼應三年五月十六日重成病死年六十九號即翁了心其後經年土崩石傾其子志兵衛重主頃聞追其志畢修覆之功依价者請記父之履歷固辭弗措乃述其大槩作一絶示之

從役難波揚勇名 稻川療湯本源亭  
清泉日夜流無盡 洗出忠心一寸誠

延宝己未冬 整宇主人春常法眼林重民識  
孝子山口志兵衛尉重主建之

金毛院 光子内親王 御宇の額あり  
瀧樹大明神 御宇の額あり  
停佐野 今宿 大野 德原 市場 前野

松の尾村 右の山上に松尾大明神の社あり 毎年に月上の酉 松尾川 白川の

去山驛 西の山に多賀 一里山 森理野 人のあひまらぐくあり是れ松尾村の

田村大明神の社 村の北に大明神と額あり 坂上田村丸の靈を祀る 別當あり社

田村川 橋あり 明神の傍あり 一名白川

田尻野 柳を左の 右に親音堂あり其山上に一木松あり 猪崎明神 柳を

解虫ヶ坂 地名の中まみ細 右の谷に解虫の塚あり 猪鼻 山中聚樂寺 松親

▲江州勢州國界標本 勢州の邊の堀切川を以て一辺と爲勢の國境と

鈴鹿山 として鈴鹿の山も今の街道を越んで南北に聳白去信八百

奥言の事申す今ののびくくとして鈴鹿郡賦よりんべり





いさ此川  
 此川上を松尾  
 川と云ふの白  
 倒替は此  
 換して松尾  
 の歌宿は  
 とつ次第  
 見へり



土山

とらひてりく  
 此流解一がし板とつへが  
 中づ坂の下れやうに押しの  
 且く其系後を考ふるよ  
 於麻坂の下の間よ去る  
 なる一されが  
 百年の  
 星霜  
 と経  
 び其心  
 船の板  
 を改む  
 るのみを



考合とて  
 今按ふ  
 街石  
 へ今よ  
 遠い  
 て名不ふど  
 も異るよ  
 わり今若種  
 と松尾との  
 水の方、松宮  
 村の元、松宮  
 とて松宮の  
 旗定け玉種  
 松宮の心、大やう  
 板のそと板と云  
 こくを以て  
 考合とて





八幡と云ふ鈴鹿官道の間九廿六町往古と山城宇治より伊賀名張  
を経て伊勢に入る其なる此との内長岑と云ふを誠えり今の社  
より二所程林藤へ出る細道也是古より云ふの中なる

後撰集  
平城天皇大同二年遣賊鈴鹿又龍と旅人を悩とす禁廷に訴ふ

勅又因て田村丸これを獲又弘仁年中上皇と此より遮る其後延喜七  
年九月捕鈴鹿山群次其張本十六人殊之

三神山 鈴鹿山群次其張本十六人殊之  
田村社 田村軍の垂ををわす

坂本村 此及より鈴鹿川橋あり洪水以後この根を古町と云ふ

田村社 田村軍の垂ををわす

かご石 是も鈴鹿の山あり毎年二月八日磐石繩を張て人を不考愛宕山あり

所名

たつらと坂と云ふ所の坂の名へのがらり八丁

秋のれいゆりありるる鈴鹿山と雲とれり

鈴鹿神社 本殿天照大神荒魂津御尊氣吹戸王尊速

佐須良姫尊相殿に座と後々倭姫命と合祭りて別号と片山社

社も縣主の神社とも云へり

頓宮 鈴鹿郡の頓宮の頓宮に

通俊

所名

橋の希天希と伊勢の海の視のり

皇加川院  
治詳卿  
皇加川院  
治詳卿  
皇加川院  
治詳卿



田村九  
誅仲成

加茂自美律  
宮祭記云  
暖微天皇  
弘仁元年  
去上平城  
天皇藥子  
の露くまひ  
兄仲成が  
外うく御位  
復らんが都  
を迂んを足  
よんで勅ひて諸國と  
わたり田村九を大納言  
として禁中をまじひ



上自美大い怒りて畿内  
紀伊の兵を召  
薬子と日興して園赤  
に赴き路人を  
田村九と大納言  
一々を綿丸を  
副將として御幸と  
りお田村九のちり  
に極うぬと深く加茂明  
神と祈り即銘麻の園  
これを遮る此はあ  
陣戦ひさふ被神力の加  
りなるあやねまの軍兵  
ふも勃く汁に現れて逐  
仲成を射殺し上皇と  
宮に還し奉ると云  
後田村の誅は清水の観音佛力を  
著せしハこれのみならず





田村大明神社



秋葉  
大社  
逆拜



田村川



まづありやがていらせくおむよの布や天のありまがなるくもなき橋かゝる  
 又日昔もこの王の修勢は修勢いし終麻の石橋にて修りたる石を直し修勢の修り  
 せ修いし其くちら今も終麻の社あり石の川のむらとせよめでたりのたりの云  
 橋の布天の二里塚の東の橋はあり尚國の記の  
 〇岩窟 左の方より大きき岩の穴切ぬき前庭の石堂にまつり内は阿弥陀観音地蔵  
 を安置し其のくちらよは泉科よなきなるは法勝の親孝と稱す

坂の下驛 つらへ終麻の山の林にあり一石の下のつらなり慶安三年  
 九月二日の洪水にて山川田畑民屋ごとくを頽廢を依之公より修補と  
 加へられ十町斗東宿をうりま今この坂の下足は右名星を鈴麻の驛と云

金藏院 仁壽年中慈覺大師の開基鈴麻山護國寺とて日光の末  
 本尊の薬師如來體中も傳教大師感得のすはかみ尊像腰籠云  
紺衣の終麻の林にありは終麻の後世不引中興開山眞盛法印より慈覺大師の法眷なり

小女溪 官道又橋二つあり橋名曰驛の中社と東の端とあり  
 法安寺 禅宗にて石佛唐申の像あり 燒地藏 當ヶけ村  
寛文の法橋を年此地にて加差盤毎の秋あり

権現山 一里山 朝日弁天祠  
権現山の石あり去居石垣のうらあり今地の字に終り

四軒茶屋

解虫が坂

世傳云昔此谷に  
 大なる解虫あり妖  
 とはて人を殺せど  
 旅僧是れ會て  
 佛經を説き依  
 て是と歩殺し  
 其塚を築く云  
 或云昔此谷の山賊埋  
 伏して鬼魅妖怪を  
 企て人々を威す  
 物を奪ふ賊と名  
 て解虫といひたり世  
 横殺する者なり  
日本に主麻珠とキ  
 則賊の是是同





山中

雅康卿園

東街道記

山中と不

にてわらぎ

と伝まき

よふごゑ

それうと

まけ

山中又

まき

まき

まき

まき

まき

まき

まき

まき

まき



筆捨山

のやうに流るるやうに筆捨の俗説もあはれ

羽黒山

園の中より北所斗心、岩あり但て筆捨ふと傳ふ山なり

あみ出と一と云もいとぬ大石層々

知て虎豹熊羆の栖ともいふべし

大信のいふ権現の御法を信じて昔次信忠信貞不頼ありて上落せし時此石にてあやめりしありて

遠く本國の羽黒と大権現は新権をわけて其後始末ありて

亀石

天守石

布袋石

花瓶岩

よさぬけが淵

茶鍋の淵

瀬村

長持石

ころび石

園屋

細き小路

御新殿塚

火縄

今驛名

今驛名

今驛名

今驛名

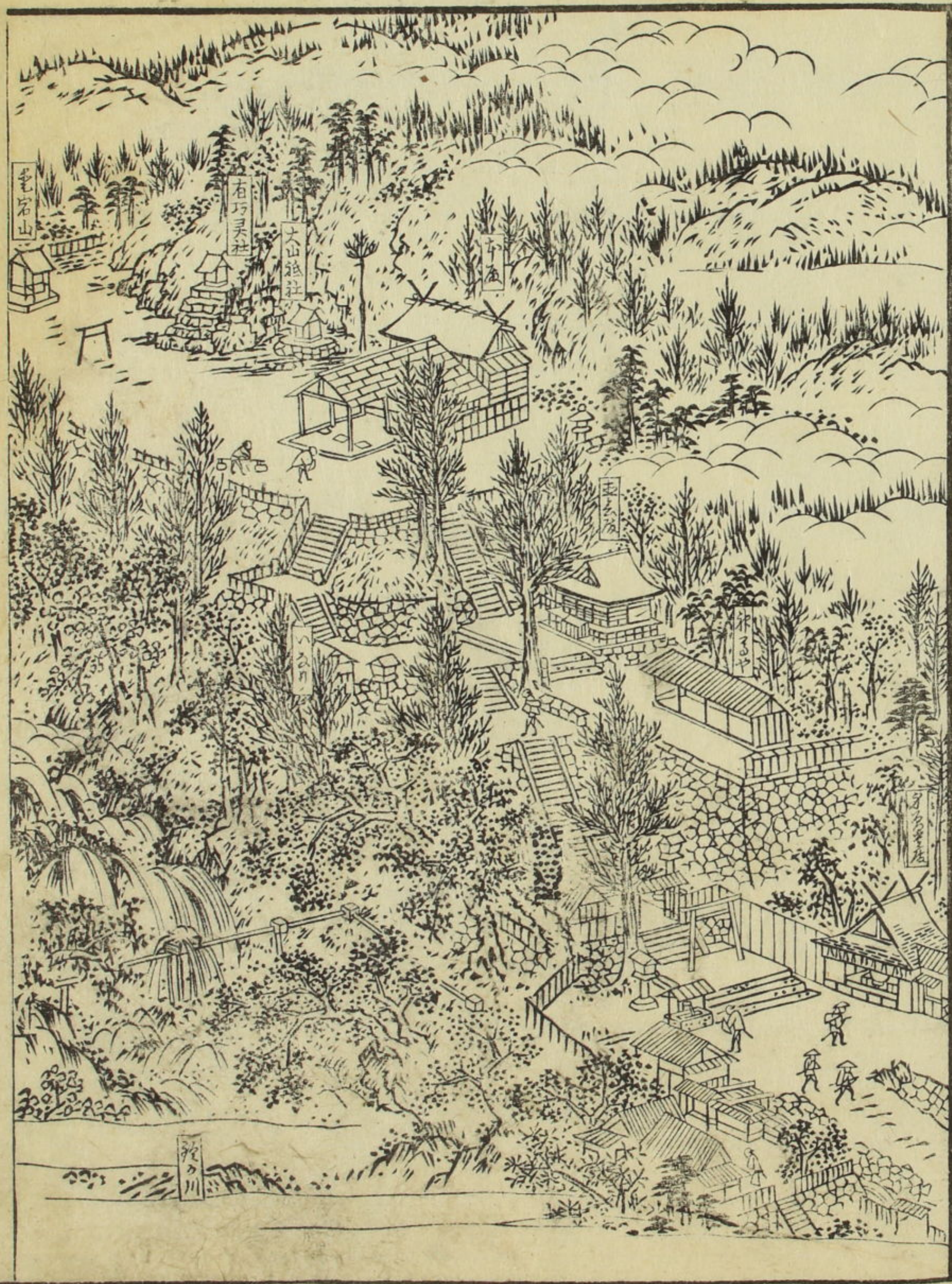
今驛名

今驛名

今驛名

今驛名





鈴鹿山  
鈴鹿権現社

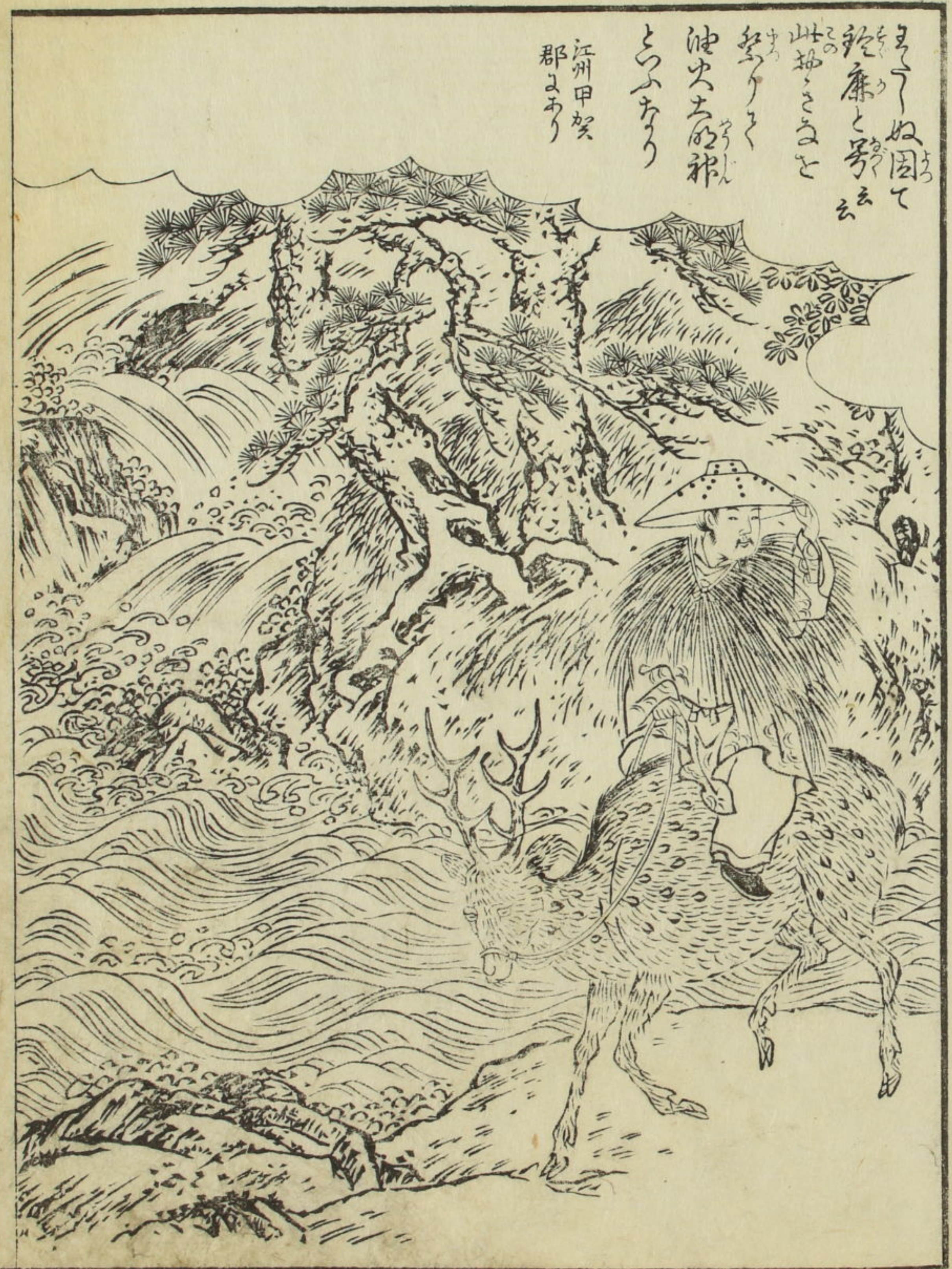


清見原天皇  
鈴麻川と渡  
王孫の圖

天武天皇大友皇子  
龍宮を御遊より麻原  
を経て此所に在り  
孫麻伏巻と云ひ  
是の時山中に燈  
の光を以て一人の公羽  
ありて天皇と謂て  
我れ此山の神大山祇とて  
案内に添き給ふ水増  
つらうに孫麻伏巻の  
麻来りて天皇と厚い  
なりて双路の鈴を付て



まうぬ因て  
鈴麻と号云  
此神と云と  
おろろ  
神火土の神  
とふちり  
江州甲斐  
郡より







この郷の産物  
 又板の本櫛  
 板の弓弦と  
 て北畠教具  
 々の記入え  
 又可駒  
 遊て音之  
 流谷川  
 なるあ  
 の合



活游記

坂の下  
 古名乾藤沢



鈴鹿園趾 拾遺抄云 逸坂 不破 鈴鹿。日本三園之云 續日本後記曰

桓武天皇の時始て建後醍醐天皇の御宇に園所停止  
帝の朝崇峻帝聖武帝天武帝の朝よむも皆停交治より停勢治のめりも園史  
よみ入る近により停勢の鈴鹿へ通治せしむる光孝帝の仁和二年新道を開れしは始  
かりき首の鈴鹿の園の上の方ありしありしや坂の下宿のなるれの川の南に園趾臺といふ  
地名を是後の園居の跡といひ傳へり又建仁二年水安院殿の多合長明が記より去る  
ころも鈴鹿の園に今の園宿よみ入るなり園宿の中所り園居跡のとも地名あり承  
保十二年鐵田長信停勢園の園所を停止とも園宿よみ入る園所ありしは鈴鹿の園と九  
左領鈔附録よみ小松内府重盛公の十八世龜山の城注園安藏守密信武勇をいふ  
左勝川元近一益と合我の附此地は新城を築き防ぎ我よこれよ元龜四年のつかり又  
勢陽府志よみ天正十一年八月本傳よみ新城を築くとあり其つと同日つて去る月地  
名いふ九つて遷て考ふ

### 地藏堂

九園山北勢陽府志よみ寺とあり。龜山畧記云真言九園山應宜僧都也若披白  
比丘尼八百餘人等よみ室よみと記を額あり又宗長紀巴の記よみ地をのその像  
の建立より勢陽府志よみ地を薩埵傳教大師の園基其後文應年中空燒  
此附尊像火滅せし文明年中尊像を堂よみ再具あり此附一休開眼の道守師  
とあり其後又田録ありて元禄九年建立なり勢陽府志

### えび橋

此の勅使ともいひて鈴鹿の園を誠るとして  
えび橋のぬれやともれ園のさくらをたのけり  
新後撰集  
定家

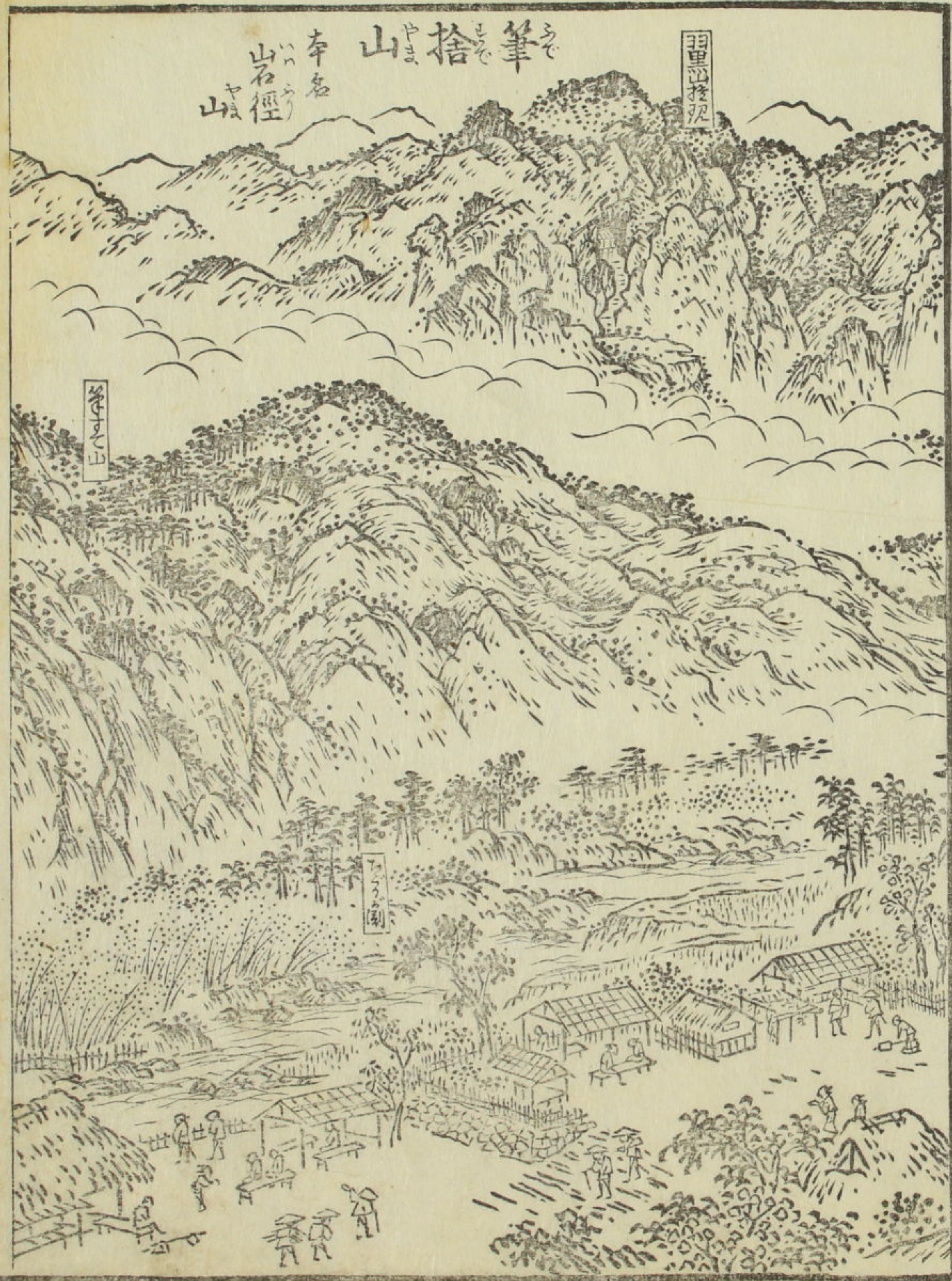
### 朝日辨天

毎年天橋  
一の瀬川

一里山にありて  
公の深草の家と  
くれ  
此宮等拾山の  
造る九軒計  
の氏神









所名

此橋の地を中より西門より西南側小橋を結ぶ橋を流るの月を其の地を  
エツと云い神文文字のそごうの言を流りてつひつて入つたか  
と云いつたがけい出でるも西の杖の切つた路の橋本より芽を  
久磯村白石明神 世神あり小松内大屋重盛公の神子資盛ありてけ  
てよりつていれり神とて其の地をいひつて入つたか

河新嫂塚 河長門守妻の塚なり河長門守の女なり  
河長門守の妻の塚なり河長門守の女なり ○三日城 信長の家老三川監物  
三日城あり

和琴の橋 上より天子の宝物を云上り和琴の橋あり其の  
此和琴の橋板にて制しり右より今に其の跡を和琴の橋と号しり

抄云累代の宝物なり但毎年新神樂万人用之。○河次分云和琴  
庶累代帝王の遺物と云ふ物語にも又云ふ 南の雲明神の森の  
の小路は架つ橋をこのと云ふ又和の森島と云ふ田の字あり

和琴の橋 上より天子の宝物を云上り和琴の橋あり其の  
此和琴の橋板にて制しり右より今に其の跡を和琴の橋と号しり

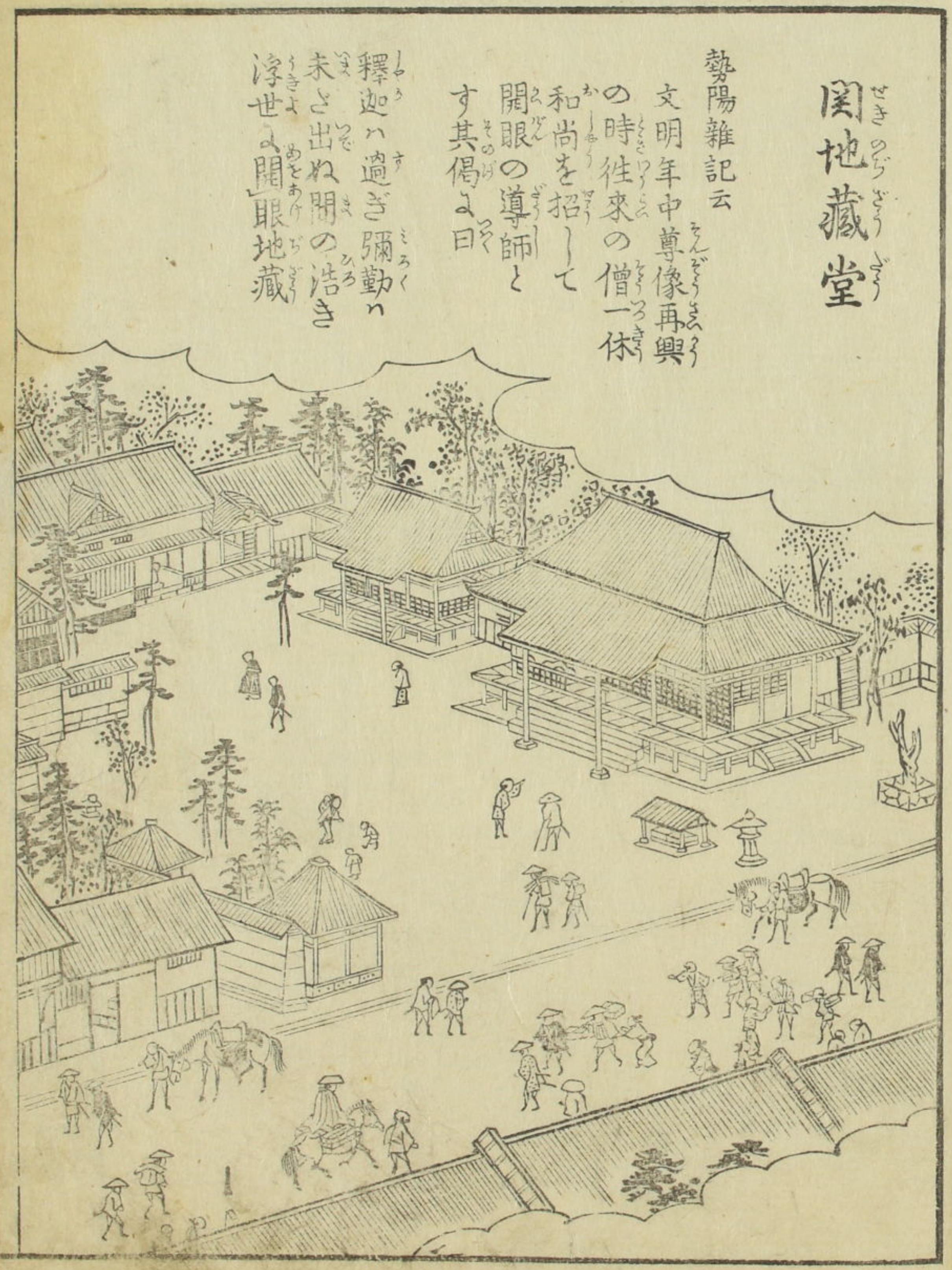
河上山瑞光禅寺 寺内は権現様といふあり  
亀山累記云此寺は曹洞宗徳安年  
中の開基寺なり三斗中真用山の

### 関地藏堂

勢陽雜記云

文明年中尊像再興  
の時往來の僧一休  
和尚を招して  
関眼の導師と  
す其偈は曰

釋迦の過ぎ彌勤の  
未と出ぬ関の浩き  
淨世は関眼地藏



俊成



同異本用眼の話

一休の因縁下向を足りけて被用眼の  
 尊師とをなれば一休をなげり  
 尊像の一陰基よのかりて佛  
 のかゝりたるまゝくつふ小使とこそ  
 用眼はとてなれとて後成も  
 足りてつゝつらう清しんん  
 足をなげりてなげりて水と  
 そくきほめたるなげりて  
 其人の地怪はくつら  
 てがさうれら心かえ  
 つひつゝ天下の老法師の  
 眼目をひらきせむびる地  
 と何とてりかたつとと  
 とひくひらるゝふ  
 ぐり入ゝとせよ  
 あいほく被用眼の  
 妙はとん



りぬてあうくのの  
 をついで教とて  
 和尚とのふの擯鼻  
 を解てそと地元の  
 首を纏ひ垂すとて  
 何とてりかたつとと  
 許はしは思ふ  
 と一々の考持よ  
 物ぶして教への  
 おくは纏ひ  
 う物怪はるゝぬ  
 かくて後和尙降洛  
 の時其まといふ  
 解とそと入の  
 をふとけ  
 マコト





豊後和尙之院藤原城之院光禪寺同國之會下村方松山永明寺の別院なりとて境内に  
國長門守源房國万捷の居處永明寺燒之の後此地地無家無寺らう會下村七十石余の今  
此寺の遺礎あり永徳年中之來の古遺蹟あり又天正十一年國宗一盛信は是の同孫を湯津  
盛儀の古業あり又天正二十年の古遺蹟あり。勢湯津志之院光禪寺も川上村にて國の中町より  
二町小なり今も遺蹟あり寺地計あり  
○按る川上村あり湯津盤村あり

湯津盤村 糸糸に兒谷とて今人あらず  
危ろく川をわけてと心月のゆつとれわにけそまやけと  
法眼抄傳

湯津盤の森 國之東三町小あり今も跡ありて小村の表と

清岸山福藏寺 徳山畧記に坂下西教寺流藏田三七信者の  
香花をみて是は天塚長政かこんせうなり

追分 東海五ノ宮宮之 大井常夜燈を建する方系宮道なり  
どのまよきなり

関川 假橋九十間あり此橋九月より翌に月を國本修村の架り  
貞享二年乙丑十二月の定めあり

古驛 村あり 珍麻郡賦より古厩とて神宮幣馬のやどり不也  
今も馬を建て宮造りのおくたりのわい即神宮の表あり印之  
神へまよきなり此處村と楠原村との間珍麻郡本郡の境なり ○楠原村 此村の表  
水上月郡福徳村の 山奥よりうきと出れ ○天神社 村あり 延喜式珍麻郡十九座の中志  
波加支神社とて是なり

所名 郡本奄

林口 右名松尾 明應中林誠守祐幼の城趾あり

觀音堂 大同元年の草創とて天正三年湯川一益兵史にけり今も  
中繩 津久慶長之末の右記に元和二年丙辰城主此村を置奉貢殿

免の地 此村より西南の方より山岩山嶽あり  
修勢國中のなるなり

棕卒 中繩の南の方より往來の大路へ安徳郡とて是出棕卒も安徳郡なり  
さきく東より西の方よりいふ奄麻郡之昔此辺よりあつた松尾(往來)なる

片瀨城趾 村中月江寺とてる寺の意より大なる様の本あり 里の表とてるふ  
村中月江寺とてる寺の意より大なる様の本あり

高野尾 舊觀尾其の表に村あり天王の遺蹟あり多る非素素島鳥  
尊の表にありけり中比の尾とてるなり

豊久野 惠日堂記に云雄略帝の御時丹波國より豊受大明  
神を勢州へ遷し奉る時珍麻の神戸よりて此野より宮を修り

体よりせ給ふ御路をれば等由瓦神とてるなり  
其の表あり往來一里まづりの

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松

錢掛松 高野尾の東の暖地より多き一株の松あり是即松



関の追分  
東海道  
糸官道





いふに神宮の御路をりしにいざる存とて去りて松とて人  
て小祠ありて松のこゆりたるに今に定に來りて  
右神宮と遙拜し御供料として松の枝み強をうけて米穀  
さへと祈りしに松み強掛松といひり。又伊勢國臣部省圖帳  
篇曰豊岡野の神靈者豊斟淳尊之食。是を以て松を  
首此野と豊斟淳尊の社ありしが後此社のうせり其松を  
挿て強掛松といひり。兩説の内國帳の方より強り今の役  
明應七年のゆかりありて一身田山内務川  
羽鶴老人強掛松の一説ありて其松を御優の文なり  
の付るをめて其松を以て事なりと云ふなり

**野崎** この村舊山田井也 社名抄に山田井とあり又々延喜式社名帳に  
此里今操射擲の石也

**土岐の百塚** 此塚とも云南方記傳に南朝正平廿四年小島内大臣顯能公は  
まが兵と伊勢國を合戦して去りて兵軍せりと云ふ此塚のゆかりあり  
田村西の入口西の島の中程末の大治の小うり塚ありてまが塚といふ  
楠とたむの本と云ふなり

**窪田** 此村の内馬場と云ふ所の南の田地の邊に政平ありて堀の内なるあり  
三年の佐治文は窪田の産地に因縁を可廣とあると云ふなり

光明山安養寺 本尊阿弥陀佛 基壇十王堂あり  
東邊寺佛通禪師再興して其後其言の先賢阿闍梨本此寺を修り文強の  
て今此地も其言の先賢阿闍梨本此寺を修り文強の  
郡明野ありて恒より其言の先賢阿闍梨本此寺を修り文強の  
汚穢を濯し其因縁ありて今此地も其言の先賢阿闍梨本此寺を修り文強の

**六大院** 六院ありて後拍系天皇勅命六院を建てて寺院百石と跡せらば慶長  
年中安養津惠日山親善寺人六院とも云ふ後今大空院の邊にあり

**空也堂** 冷井と西念寺 此村のこれを守る者三又新ありてこれに  
諸を唱へて神抄の修りしと云ふ系空也寺に曰く上人自他の儀  
甚古物にそ鏝にいたれを征と云ふ又八ッ股の藤の角と付物と云  
毎年十一月十二日法事を修ふ 秘記ありて系空也寺と云ふなり

**坂部村** 窪田村ありて一身田の標石あり

**例徳洲齋塚一宮** 坂部村より大治を二丁計南末石の小橋ありて  
是を例徳洲塚と云ふ礼儀手抄にもあり 首級宮ありて

時例として此川の洲にて水襖一級殿へ入らせ給ふと云ふ今に  
うまうり系殿の殿とこの橋より一町計東田の中又塚ありて  
の橋より里人より塚と云ひて俗説にもありこれを系塚と云ふ



豊久野の  
鏡掛松

鏡掛松といふ  
まらぢちさく  
らもかけた  
る松を

まらん  
けり  
あし  
かた  
ち  
終



のこ  
り  
びを  
かけて  
たす  
おは

自然軒  
鈍全





訛り 又橋より二所いぐ一茶屋村の西の山の方よりありて田の中より森あり  
 此の類より春日とありて後世の  
 講の類より春日とありて後世の  
 講の類より春日とありて後世の

一身高田山專修寺 下野流一向宗の本山にて本堂廿四間四面

祖師を安置と儀十八間四面の堂阿弥陀如来也 檀金善光

高田とつゝ下野國ありて國勢をもとりて人々深く親信上人とや

下野國の産にて國勢をもとりて人々深く親信上人とや

淨依一剃髮して真佛とて唯授一人の口授を上人より得て一向專修

專念の旨を弘め佛寺と創立し高田專修寺とてりて佛上人

より八代下野國にありて第九代大僧都法印真惠の定顯

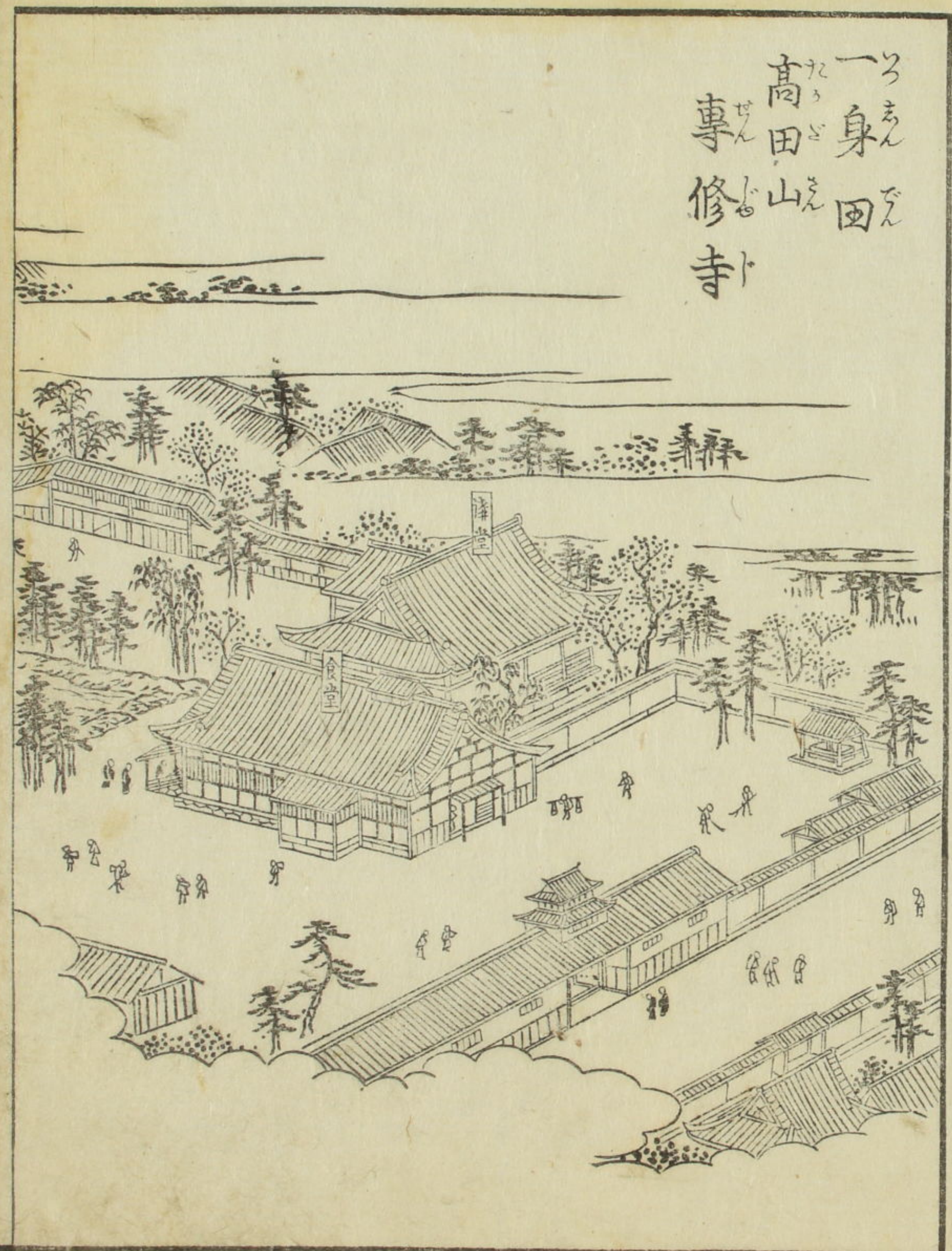
上人の志を以て中國佛法の大願を起し加賀越前近江等と

經歷して伊勢國より先哲く心を化度し秘の朝明郡久矣

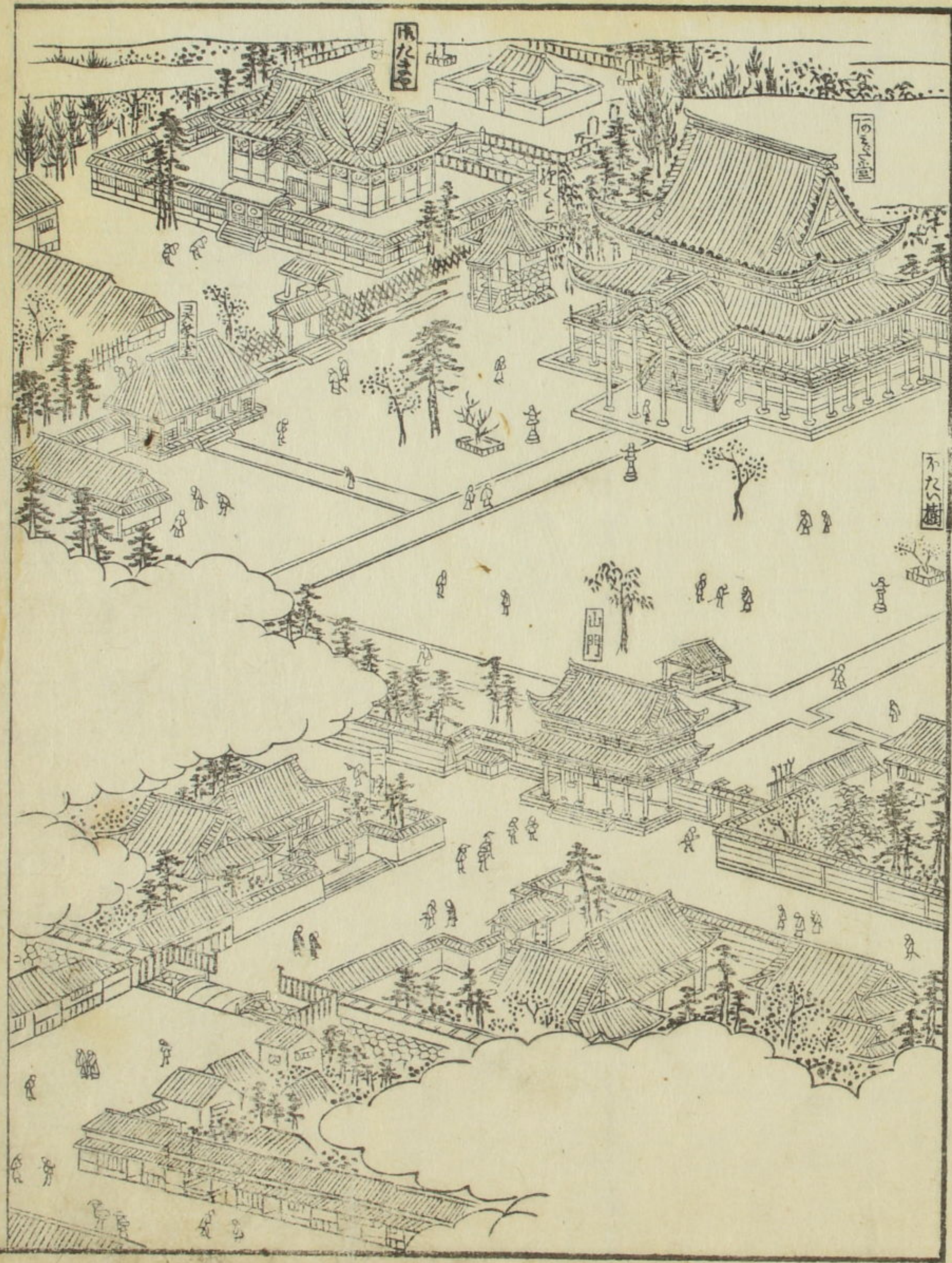
智村光明寺に居し其後三重郡小松村中山とて石に寺院を

建立して移轉せらるる猶もみ奄藝郡黒田村折言祐とてり者急り

一身田  
 高田山  
 專修寺







其二

二ノ三十七



招請して一身田に後らる干時寛正五年甲申上人卅一歳  
親嘗より縁ゆかりて昔親嘗上人系宮の附此地に入江の磯にありて人西のり  
依之備儀の靈蹟をみるを以て承く住居を定むる寛正六年乙酉眞惠卅二文  
下野國高田専修寺を伊勢國沓掛郡一身田に移し終身是より一身田を本寺と  
野州高田を舊基の靈地として掛不と  
後土門流勅額所として宣旨被下置如左

高田専修寺門流事

如先相續可被發生海處有其外諸國門後可有進退之旨  
天氣不候也及之从状

文明九年

眞惠住房

右大弁判

又信長之勢凡九人の始由寺十二世寛惠上人と甚賤くして勢州平  
均の謀ると證せらる依之由寺一書送る不の禁制の札如左

高田専修寺門流

當寺境内不可陣取事

放火之事 右之條於今遠犯者可為嚴科者也

天正四年

信長判

所在

此村の名代一身田といふ三代実録元慶三年丙寅六月勅參河國播磨郡荒原田  
一百所賜子内親王為一身田これ村として考むる一身田といふ田也當寺田にて其一身  
田は後内親王梅とありて其田を賜ふに後其身田といふ田也

三軒茶屋

平野村の  
○中野 大乃已所村  
の支御

大乃已所神社

中野の森の中  
今も素女大明神と稱せり  
獅子殿一  
あり

大郡田

上流下  
津の河つきの小の入口也  
右名も小丹又雄丹と云東南海邊  
より一鳴應七多大地震の波は流と

小丹浦

或は鳴呼見  
順徳院之御製表

又るりやの巻の美砂の白く又日くけりかひををたし風

勢陽府志云志の國のちりりて當國飯野郡安濃郡麻績神社の系下に也

塩金明神

塩屋といふ所あり延喜式神名帳安濃郡小丹神社と云

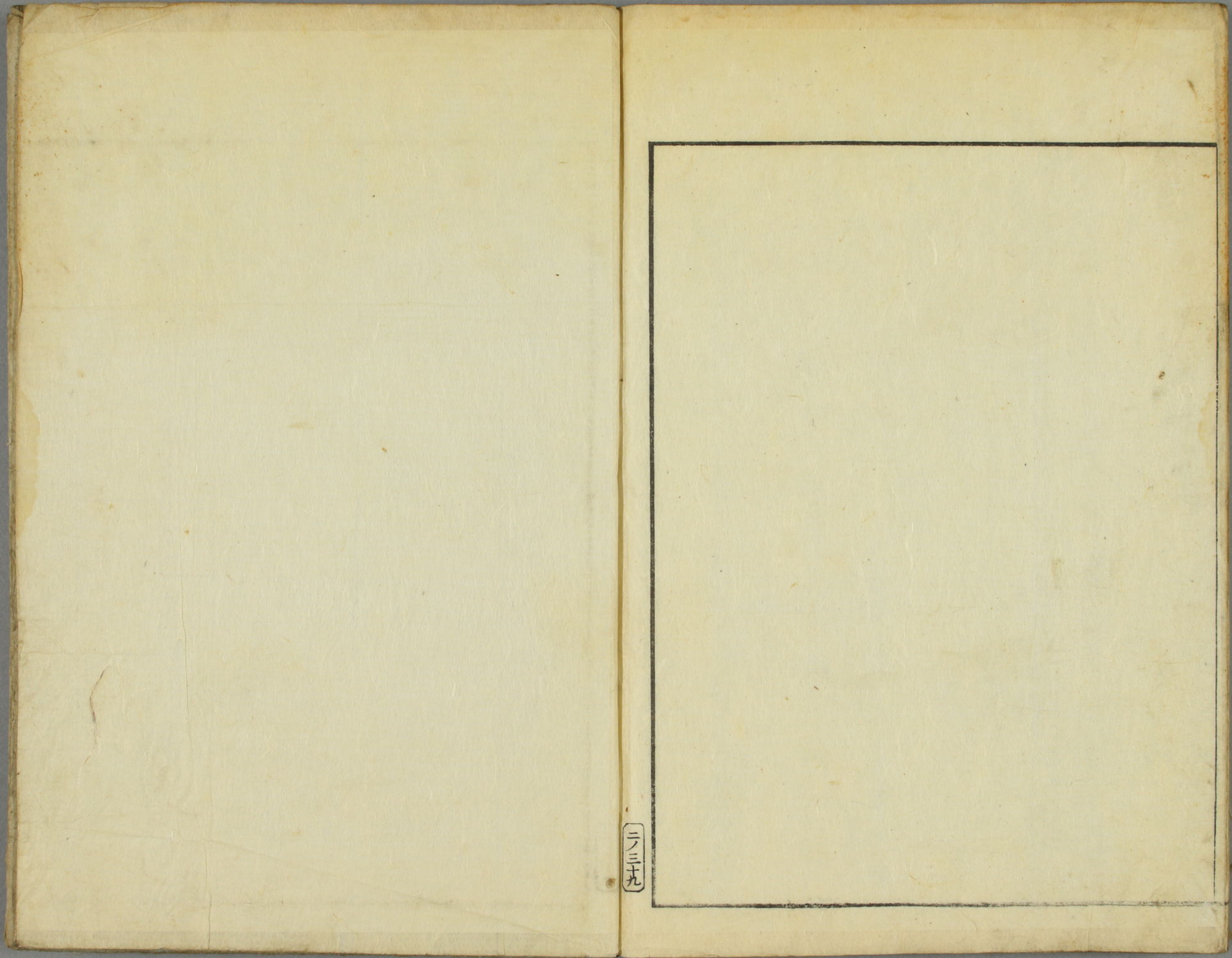
るとも是也

舊記云景行天皇四十九年八月癸酉不祭云社記也

詳也

伊勢參宮名所圖會卷之二終





三三九



